

否定表現における「対照性」について日本語とドイツ語の対照研究的視点から：「…は…ない」と「…nicht…(, sondern …)」

竹内, 義晴
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796248>

出版情報：言語科学. 23, pp.1-12, 1988-02-10. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：

否定表現における「対照性」について 日本語とドイツ語の対照研究的視点から

「... は ... ない」
と
「... nicht ... (, sondern ...)」

竹 内 義 晴

1. 部分否定か対照の否定か

ヤーコブス (Jacobs) 1982 はドイツ語の否定表現について、対照的否定表現と非対照的否定表現 (kontrastierende vs. nicht kontrastierende Negation) の二つの種類に分類しています。

- 1) Luise rief Peter mit Absicht gestern nicht an.
- 2) Luise rief Peter mit Absicht gestern nicht an, aber HEUTE hat sie einfach vergessen, ihn anzurufen.
- 3) Luise rief Peter mit Absicht gestern nicht AN, sondern SCHRIEB ihm einen Brief.

(1)、(2)、(3) はそれぞれ、ヤーコブスの例文¹⁾です。ヤーコブスによれば (2) のように、表現が「aber-文」によって更に言いつがれるような場合には、(1) は非対照的な否定と理解されます。他方、(3) のように、「sondern-文」によって言いつがれる場合、(1) は非対照的な否定と理解されます。(ヤーコブスの例文中、大文字で書かれた部分は強勢がおかれることを表します)

ヤーコブスの説明には、不十分な所があります。例文 (3') を見てみます。

- 3') Luise rief Peter mit Absicht gestern nicht AN, sondern SCHRIEB ihm einen Brief. Aber heute hat sie einfach vergessen, ihn anzurufen.

(3') は (3) のあとに、更に「aber-文」をついだものです。この場合には、(1) は対照的否定であり、かつ、非対照的否定であると理解されるのでしょうか。「Aであり、かつAでない」という結論が出てきてしまっは、およそ議論というものは成立しません。ヤーコブスは、否定文に「aber-文」をつなぐテストによって非対照的否定という解釈の可能性をを確定しようとした。この点で、ヤーコブスは誤りをおかしているようです。接続詞「aber」と「sondern」は機能的に全く異なる性格を持っていることを考慮に入れていないのです。例文 (4)、(5) を見てみます。

- 4) *Luise rief Peter gestern an, sondern ist noch am Leben.
- 5) Luise rief Peter gestern an, aber er war nicht zu Hause.

「sondern」は否定とのかかわりでしか用いられることはありません。先行する文が表現として否定を含まない場合²⁾、その文を「sondern」で言いつぐと、文 (4) のように、文法的におかしい文ができてしまいます。それに対して、「aber」は、先行する文が否

定を含むかどうか、ということには関係なく用いられます。先行する表現の内容、またはコミュニケーションの参加者にあらかじめ共有されている知識から一般的に推論されることがらと、それを言いつぐ文の内容が矛盾することがあります。「aber」はそういう前後関係の矛盾をはらんだ接続関係を表現するのです。文 (5) では、「ルイーゼがペーターに電話した」ということがらを言っていて、そのことがらから、「ペーターが家に居た」ことが一般的に推論されます。しかし、そうではなかったということ、「ペーターが家に居なかった」ということがらをそれに言いつぐので、「aber」が用いられているのです。

私の考えでは、否定文に「aber-文」をつなぐテストによって非対照的否定という解釈の可能性を確定しようとするのは無理です。否定文について、対照的否定という解釈の可能性は、「sondern-文」をつなぐことによって確定されるのです。その確定される対照的否定という解釈に対する相補関係としてしか、非対照的否定という解釈は理解されないでしょう。つまり、「sondern-文」によって言いつがれる否定文、または、「sondern-文」による言いつぎを予想した否定文、以外の否定文は非対照的否定です。非対照的否定文は、「sondern-文」によって言いつがれないし、非対照的否定文では「sondern-文」による言いつぎが予想されることはありません。

ところで、伝統文法では、「sondern-文」によって言いつがれる否定は部分否定 (Sondernegation/Satzgliednegation) であるとする議論をしています。例えば、シュルツとグリースバッハ (Schultz & Griesbach) 1967 の文法書では

文成分を否定する場合、nicht は文成分の前にくる。それから否定された文成分の訂正が接続詞 sondern の後に続く。... (日本語版 S. 583)

としています。また、グレーベ (Grebe, Paul) 1973 のドゥーデン文法では

否定語は文の一部分だけを否定する。(部分否定) ... 部分否定は、sondern を用いた表現が接続する場合、いつもそれに先行する。... この sondern-付加文を、修正文と呼ぶ。(S. 596)

としています。そういう議論を踏まえると、Jacobs のいう対照的否定と非対照的否定の対立というのは、伝統文法の主張する部分否定と文否定の対立と重なっています。そうなのであれば、対照的否定・非対照的否定というのは、文否定・部分否定のことを別の言い方で述べているのにすぎません。この点について、ヤーコブスは文否定、部分否定の概念は役に立たない、という議論をしています。彼によれば、文否定、部分否定として扱われてきた問題を遺漏なく、かつ重複することなしに説明するためには、対照・非対照の否定の概念と、文の焦点 (Fokus) の概念が必要であるとしているのです。

しかし、ヤーコブスの言う、対照的・非対照的否定が、「sondern-文」によって言いつがれるかどうかというテストによって確かめられるものならば、「文否定・部分否定の概念と、文の焦点の概念によって伝統的に文否定・部分否定として扱われてきた問題を遺漏なく、かつ重複することなしに説明できる」としても、主張としては対照的・非対照的否定の用語を用いたものと同じことになってしまいます。

それでは、対照的否定と非対照的否定というふたつの用語は全然意味をなさないのだろうか、ということが当然問題になります。(6)、(7) は文 (1) を日本語に翻訳したものです。

- 6) 思う所があって、ルイーゼはペーターに電話しなかった。
- 7) 思う所があって、ルイーゼはペーターに電話はしなかった。

(6)、(7) はおよそ (2)、(3) の対照的否定・非対照的否定、または文否定・部分否定の違いに対応した解釈です。(6)、(7) を日本語として観察すると、(6) の下線部、「は」という表現がこの二つの文の意味を区別させるポイントであることがわ

かります。この「は」は日本語の文法では対照の「は」と言われるものです。(2)、(3)の文の解釈の違いは、日本語に翻訳した場合、対照を表す表現「は」が用いられるかどうかという違いとしてあらわれるのです。Jacobsの主張する、対照的否定と非対照的否定の区別も、ドイツ語と日本語の対照的な視点から見ると、それほど意味のないことではないのかもしれませんが。

しかし、これだけの観察から、日本語の対照の「は」で表現されるような意味での、「対照性」がドイツ語の否定表現にもある、などと断定をすることはもちろんできません。ドイツ語の部分否定といわれるものが、日本語では《対照の「は」+否定》という形で翻訳される、ということがどういうことなのかをまだ検討してないのです。

以下では、ドイツ語に、「対照的、そして、非対照的な否定」ということが認められるかどうか、ということについて、日本語・ドイツ語の対照文法的な視点を踏まえた上で、若干の考察を加えようと思います。

2. 日本語の対照表現と否定

以下の例文をみてみましょう。わずらわしいので「思う所があって」の表現は以後省いて観察を続けることにします。

- 8) ルイーゼはペーターに電話をしなかった。彼女はそのかわりに手紙を書いたのです。
- 9) ルイーゼはペーターに電話をしなかった。なぜなら、彼女は口が不自由なのです
- 10) ルイーゼはペーターに電話はしなかった。彼女はそのかわりに手紙を書いたのです。
- 11) ?ルイーゼはペーターに電話はしなかった。なぜなら、彼女は口が不自由なのです。
- 12) ルイーゼはペーターに電話をしたのだろうか。

(8)、(9)にみられるように、対照の「は」が用いられていない場合、代替的なことがらをしめすコンテキストでも、そうでないコンテキストでも、文法的なおかしさはみられません。「電話をしなかった」ということが、「手紙を書く」という代替的なことがらをしめすコンテキストに埋め込まれた(8)は文法的に正しいものです。他方、「電話をしなかった」理由を表すコンテキストに埋め込まれた(9)のような場合でも、文法的なおかしさはみられません。

ところで、(10)に現れるような対照の「は」を用いた文は、代替的なことがらをしめすコンテキストではおかしくありませんが、(11)におけるような、代替的なことがらをしめすのではないコンテキストに埋め込まれた場合には変な感じになってしまいます。久野 1973 によれば、対照の「は」を含む文は、比較の対象が明示されるか、比較対照されるような非言語的コンテキストが成立する場合にのみ坐りがよいものとなります³⁾。もちろん、久野がいうように、主題を表す「は」に先行する名詞句におけるような、その名詞句が文脈指示の名詞句か総称名詞句でなければならないという制約は、対照を表す「は」に先行する名詞句にはありません⁴⁾。だから、(12)のような質問に答えるような場合は、「は」は主題を表すと理解され得るのです。このような場合には、(11)の文法性にはもちろん問題は起きません。

以上の観察で注目すべきことが一つあります。それは、久野のいう、比較の対象が明示されるか、比較対照されるような非言語的コンテキストが成立する場合にも、対照の「は」の現われない文が問題なく使われることです。(8)では、否定は「は」が使われるという意味での対照的な否定ではありません。「は」の使われない否定文が、対照

的・代替的なコンテキストで解釈され得るのです。このような解釈を受けた場合の否定は、むしろ、部分否定とでもいうべきものです。少なくとも、対照の否定とは違うものであり、代替的なことがらと無縁なわけでもない否定なのです。

私は、竹内 (Takeuchi) 1982 で、ドイツ語の否定「nicht」は基本的に部分否定であることを、前提の問題とからめながら示しました。私は、文否定、部分否定の対立はない。自然言語の意味記述について否定操作は基本的に種類だけで充分であり、それは部分否定的な否定操作である、という議論をしました。否定は、任意のタイプの関数について、その値の付与についてのみ、操作を逆転する、しかし、その関数の操作域における、意味論的前提などの条件に変更を引き起こすことはないという $\langle \alpha, \alpha \rangle$ タイプの関数だという議論をしたのです。私はこの関数を意味の表記にあたっては「NEG」と書き表すことにしました。

「電話する」を便宜的に $\langle 0, 1, 1 \rangle$ タイプの表現とし、個体名、「ルイーゼ」と「ペーター」を $\langle 1 \rangle$ タイプの表現とします。さらに、上記の「NEG」と、 λ による要素抽出を道具立てとして用いる断片的な言語 L^0 を仮定します。この断片的な言語 L^0 では、「行為主体=ルイーゼ」が「動作の受け手=ペーター」に「行為=電話する」を行うという命題 (8-0) が否定されることについて、少なくとも、以下に表記されるような多義性についての可能性が認められます。

8-0) (電話する $\langle 0, 1, 1 \rangle$, ルイーゼ $\langle 1 \rangle$, ペーター $\langle 1 \rangle$) $\langle 0 \rangle$

8-1) (NEG $\langle 0, 0 \rangle$,
(電話する $\langle 0, 1, 1 \rangle$, ルイーゼ $\langle 1 \rangle$, ペーター $\langle 1 \rangle$) $\langle 0 \rangle$
) $\langle 0 \rangle$

8-2) (((NEG $\langle \langle 0, 1 \rangle, 1 \rangle, \langle 0, 1 \rangle, 1 \rangle$,
($\lambda, Y_{\langle 1 \rangle}$,
($\lambda, X_{\langle 1 \rangle}$,
(電話する $\langle 0, 1, 1 \rangle$, $X_{\langle 1 \rangle}, Y_{\langle 1 \rangle}$) $\langle 0 \rangle$
) $\langle 0, 1 \rangle$
) $\langle \langle 0, 1 \rangle, 1 \rangle$
) $\langle \langle 0, 1 \rangle, 1 \rangle$,
ペーター $\langle 1 \rangle$
) $\langle 0, 1 \rangle$,
ルイーゼ $\langle 1 \rangle$
) $\langle 0 \rangle$

8-3) ((NEG $\langle \langle 0, 1 \rangle, \langle 0, 1 \rangle \rangle$,
($\lambda, Y_{\langle 1 \rangle}$,
(電話する $\langle 0, 1, 1 \rangle$, ルイーゼ $\langle 1 \rangle$, $Y_{\langle 1 \rangle}$) $\langle 0 \rangle$
) $\langle 0, 1 \rangle$
) $\langle 0, 1 \rangle$,
ペーター $\langle 1 \rangle$
) $\langle 0 \rangle$

- 8-4) ((NEG<<0.1>, <0.1>>, (λ, X<1>, (電話する<0.1.1>, X<1>, ペーター<1>)<0>)<0.1>)<0.1>, ルイーゼ<1>)<0>
- 8-5) (((NEG<<<0. <0.1.1>>, <1>>, <<0. <0.1.1>>, <1>>>, (λ, Y<1> (λ, PRED<0.1.1> (PRED<0.1.1>, ルイーゼ<1>, Y<1>)<0>)<0. <0.1.1>>)<<0. <0.1.1>>, <1>>)<<0. <0.1.1>>, <1>>>, ペーター<1>)<0. <0.1.1>>, 電話する<0.1.1>)<0>
- 8-6) (((NEG<<<0. <0.1.1>>, <1>>, <<0. <0.1.1>>, <1>>>, (λ, X<1> (λ, PRED<0.1.1> (PRED<0.1.1>, X<1>, ペーター<1>)<0>)<0. <0.1.1>>)<<0. <0.1.1>>, <1>>)<<0. <0.1.1>>, <1>>>, ルイーゼ<1>)<0. <0.1.1>>, 電話する<0.1.1>)<0>
- 8-7) ((NEG<<0. <0.1.1>>, <0. <0.1.1>>>, (λ, PRED<0.1.1>, (PRED<0.1.1>, ルイーゼ<1>, ペーター<1>)<0>)<0. <0.1.1>>)<0. <0.1.1>>, 電話する<0.1.1>)<0>

(8-1) から (8-7) までの表記では、否定と直接関らない要素がλにより命題に代入される順番を考慮に入れていません。更に、否定の操作域にあるカッコ内の要素については、λによる代入を省略して、すでに代入を済ませた形で表記しました。簡単に言えば、否定要素「NEG」は操作域における意味論的前提について、その操作域をこえた領域への引き継ぎをブロックしていると考えられます。「NEG」の操作域内の下線をひいた表現が、代替的なコンテキストによって、対照、または強調される、いわゆる否定の直接係る部分ということになります⁵⁾。

以下 (8-1k) ~ (8-7k) までは、(8-1) から (8-7) までの表記で、「NEG」の操作域

の内に入っている部分（下線がひかれている）の表現を際立たせる、代替的なコンテキストの例です。

- 8-1k) そのかわりに、ペーターがルイーゼに直談判に行ったのです。
- 8-1k') そのかわりに、みんなが集まってトランプをしたのです。
- 8-2k) そのかわりに、直接話に行ったのです。
- 8-3k) そのかわりに、アンナが直接話に行ったのです。
- 8-4k) そのかわりに、アンナに直接話に行ったのです。
- 8-5k) そのかわりに、アンナがペーターに電話したのです。
- 8-6k) そのかわりに、アンナに電話したのです。
- 8-7k) そのかわりに、ペーターがルイーゼに電話したのです。

(8-1) の場合のように、「電話する」、「ペーター」、「ルイーゼ」の三項目のすべてが「NEG」の操作域に入っているような場合にも、その代替的なことがらを表すコンテキスト (8-1k) があり得るのは注目に値することです。(8-1k') に表されるように、「NEG」の操作域における前提を棚上げしてしまうような代替的コンテキストすら想定可能なのです。いずれにしても「NEG」の操作域に入る項目について、(8-1k) から (8-7k) までに表現されているコンテキストは、(8-1) から (8-7) までの分析に示されている (8) の様々な解釈の可能性を裏付けています。

さらに、(9-1) から (9-7) のような「は」によって対照性を際立たせた否定表現が、代替的コンテキスト (8-1k) から (8-7k) に対して可能です。この場合、(9-1) から (9-7) の表現の、代替的・対照的な意味合いは、文 (8) の代替的コンテキスト (8-1k) から (8-7k) に対するものよりも、何らかの形でさらに強まっています。(これらの例の中で、いくつかのものについては、対照の「は」を用いた否定表現と代替的コンテキストとのつながりが不自然です。これらの不自然さは、表現「そうではなくて」を適当に挿入することによって解消されるのですが、この問題については、後に第四章で触れます。)

- 9-1) [ルイーゼがペーターに電話をした] のではなかった。
- 9-2) ルイーゼはペーターに [電話] はしなかった。
- 9-3) ペーターに連絡したのは [ルイーゼ] ではない、
[電話で] ではない。
- 9-4) ルイーゼは [ペーターに] は [電話] はしなかった。
- 9-5) ペーターに電話をしたのは [ルイーゼ] ではない。
- 9-6) ルイーゼは [ペーターに] は電話をしなかった。
- 9-7) 電話をしたのは、[ルイーゼがペーターに] ではない。

以上の観察の結論を簡単にまとめてみます。日本語の否定では、代替的なコンテキストとのかかわりで、様々な解釈の可能性の輪郭が明らかになります。この解釈の可能性は、伝統的には「部分否定の問題」として扱われてきたものです。この、様々な解釈の可能性は、副助詞「は」によって表される「対照性」とは独立に成り立つものであることが、これまでの観察で明らかになりました。むしろ、この「対照性」とは独立に成り立つ解釈の多様性は「代替性」に関係するものです。そして、私の考えによれば、否定要素「NEG」という関数の $\langle \alpha, \alpha \rangle$ という特性に負っています。否定要素「NEG」は $\langle \alpha, \alpha \rangle$ というカテゴリーを持ち、その操作域が任意なのです。そして、このカテゴリー $\langle \alpha, \alpha \rangle$ の自由な性格が、まさに自然言語の「否定の係り方の自由度」を保証しているのです。

否定の操作域は $\langle \alpha, \alpha \rangle$ カテゴリーを持つ「NEG」によって任意に設定されます。「対照」を表す副助詞「は」は、否定と共に用いられる場合、上記の「代替性」に対応する否定の操作域内のことがらに対して、被いかぶさるようによ用いられます。その結果、対照の「は」を用いた否定表現の代替的・対照的な意味合いは、「は」を用いない否定表現に対するものよりも、強力なものとして解釈されるのです。

3. ドイツ語の否定の操作域は 「sondern-文」と関係なく決定される

ところで、ドイツ語の否定表現が否定される成分の直前にくる原則はよく知られています。このことは例えば、第一章で引用したシュルツとグリースバッハの説明にもそのように記述してあります。「行為主体 = Luise」、「動作の受け手 = Peter」、「行為 = anrufen」、「行為についての様態 = mit Absicht」の四者にかかわる否定表現の可能性を考えてみます。

- 13) Nicht Luise rief Peter mit Absicht gestern an ...
- 14) Luise rief nicht Peter mit Absicht gestern an ...
- 15) Luise rief Peter nicht mit Absicht gestern an ...
- 16) Luise rief Peter mit Absicht nicht gestern an ...

例文 (13) ~ (16) までの他、形態・統語的な手段によって、否定の操作域の範囲の違いを表現する様々な可能性があります。これらの例では、それぞれ、(13') ~ (16') に書き換えられると、その否定の操作域の範囲の違いが鮮明になります。

- 13') Jemand rief Peter mit Absicht gestern an,
und/aber jener war nicht Luise ...
- 14') Luise rief jemanden mit Absicht gestern an,
und/aber jener war nicht Peter ...
- 15') Luise rief Peter gestern an,
und/aber dies ohne jede Absicht ...
- 16') Luise rief Peter irgendwann mit Absicht an,
und/aber das war nicht gestern ...

これらの例では、否定の操作域の範囲の違いの決まり方は、「sondern-文」で表現が引き継がれる、ということとは関係ありません。文の形態・統語構造によって否定の操作域の範囲が決定されるのです。もちろん、これらの文に「sondern-文」を続けることもできるのですが、そのことによって否定の操作域の範囲についての影響は考えられないのです。むしろ、文の形態・統語構造によって否定の操作域の範囲が決定されると、その操作域の範囲の違いに対応して、「sondern-文」の内容が制限されてくる、と考えるのが妥当です。「sondern-文」の内容は、先行表現において否定されたことがらを受けるのが普通です。

そういうわけで、文の形態・統語構造によって決定された否定の操作域の範囲と、「sondern-文」の内容が食い違う (17) は、やはり理解できないわけではありませんが、何か逸脱した文です。

- 17) ?Luise rief Peter mit Absicht nicht gestern an,
sondern schrieb ihm.

文 (17) の形態・統語構造によって決定される否定の操作域は「gestern」です。それに対して、「sondern-文」の内容は「sie schrieb ihm」です。この双方の内容がまるっきり噛みあっていないことが、文 (17) のすこしおかしい理由です。

4. 「sondern-文」は否定文について 何を表現するのか

前章、例文 (17) に見られるように、文の形態・統語構造によって決定された否定の操作域の範囲と、「sondern-文」の内容が食い違うと、おかしい文ができ上がってしまい

ます。その理由を少し考えてみます。「sondern-文」が担う役割がどのようなものであるのかをつきとめないと、この場合の「sondern-文」と先行否定文との関係がなぜ難しいのか、ということは理解できないでしょう。「sondern-文」はどのような役割を担うのかを観察してみます。

日本語の場合は、対照の「は」を用いた否定の文が表現され、さらに代替的なことがらを示す表現が言い継がれます。この代替的なことがらを示す表現が、およそドイツ語の「sondern-文」に対応していました。しかし、日本語では、この代替的なことがらを示す表現は、対照の「は」を用いた否定の文をひきつぐだけではありませんでした。これらの表現は対照の「は」の用いられない否定文をひきつぐ場合にも使われました。さらに、日本語では、代替的なことがらを示す表現には、必ずしも否定表現がむきだしの形で、先行しなくても用いられるものもあります。先行する表現によって何らかの「欠落」が理解されれば、それでよいのです。「そのかわりに」のような表現で始まる代替表現は、その例です。

- 18) ルイーゼは寝てしまいました。そのかわりに私が電話します。
 19) Luise ist schon eingeschlafen. Ich ihn für sie an.

このことは、ドイツ語の「sondern-文」が日本語の代替表現一般とは同一視することができない、ということをはっきりと示しています。(18)のような場合の日本語の代替表現は、ドイツ語では(19)におけるように前置詞「für」を用いた表現と対応しています。ドイツ語の「sondern-文」は、先行する文などに表された何らかの「欠落」について、無条件にその補完を表現するというものではありません。第一章で触れたように、「sondern-文」は、否定とのかかわりでしか用いられることはないのです。

ところで、「そのかわりに」ではなくて、「そうではなくて」のような表現によって代替表現を始めると、その表現は、「sondern-文」と同じように、否定とのかかわりでしか用いられません。(20)のように否定を含まない文に「そうではなくて」で始まる文をつなげるとわけのわからないことになってしまいます。やはり、(21)のように、否定を含んだ文が先行しなくてはなりません。

- 20) ?ルイーゼは寝てしまいました。そうではなくて、私が電話します。
 21) ルイーゼは寝てしまったので、彼女はペーターに電話しません。
 そうではなくて、私が電話します。

「そうではなくて」という表現は、ちょっと不思議な表現です。この表現のなかの指示語「そう」は、先行表現の全体を指しているわけではありません。この場合の「そう」は、先行する否定を含んだ表現の内、否定を外した部分を指していて、その指示したことがらに対して改めて否定をしているのです。別の言い方をすれば、「そうではなく」という否定を含んだ表現は、先行する否定を含んだ表現の全体を受けている否定表現なのです。これは「そうではなく」は表現のなかに対照の「は」を包み込んでいる、ということと関係があるようです。「そうでなく」という表現の場合は、単純に先行表現の全体を指示してしまいます。このように、先行否定表現の否定を繰り返した後に、接続表現「て」でもって、先行表現に並列する表現を導くのが、「そうではなくて」という表現です。結局、文(22)は文(22a)と同等の表現ということになります。

- 22) ルイーゼはペーターに電話しません。そうではなくて、私が電話します。
 22a) ルイーゼはペーターに電話しません。彼女がペーターに電話する
 のではなくて、私が電話します。

この「そうではなくて」で始まる表現の場合は、「そのかわりに」ではじまるような表現の場合と異なり、否定表現が先行しなければなりません。この点で「そうではなくて」で始まる表現は、ドイツ語の「sondern-文」と似ています。さらにもうすこし注意してみると、さらに、(22a)の文には「そのかわりに」で始まる表現を付け加え、(22b)のような文にすることができます。

- 22b) ルイーゼはペーターに電話しません。彼女がペーターに電話するのではなくて、そのかわりに私が電話します。

結局、(22b)の文のなかで、「彼女がペーターに電話するのではなくて」という表現は「ルイーゼはペーターに電話しません」の繰り返し・言い換えです。ですから、(23)のような文が、否定に対照性・代替性が絡んだ場合の文の典型ということになります。骨組みだけを示せば、否定表現に対照性・代替性が絡んだ場合の文の型は(23a)のようなものになります。

- 23) ルイーゼがペーターに電話するのではなくて、そのかわりに私が電話します。

- 23a) A ではなくて、そのかわりに B

(23) から代替性表現を外すと、(24) になりますが、さらに対照性の「は」を外すと文(25) となります。

- 24) ルイーゼがペーターに電話するのではなくて、私が電話します。
25) ルイーゼがペーターに電話しなくて、私が電話します。

- 26) A ではなくて B

- 27) Luise ruft Peter nicht an, sondern ich rufe ihn für sie an.
28) Luise ruft Peter nicht an, sondern rufe ich ihn an.
29) Luise ruft Peter nicht an, (und) ich rufe ihn an.

(23)、(24)、(25)の日本語の文のそれぞれに対して、およそ、(27)、(28)、(29)のドイツ語の文のそれぞれが対応しています。ただし、文(27)では、「für sie」という「代替性」をあらわす表現は、余剰的な感じです。

対照性の「は」を外した(25)の日本語の例文に対して、それに対応するドイツ語の例文から「sondern」が落ちることが注目されることです。このことから、「sondern-文」は代替性を直接表現しているのではないということがわかります。先行否定表現の対照性は「sondern-文」によって際立たせられるのだ、というのが私の結論です。

私は第一章で、日本語の対照の「は」で表現されるような意味での、「対照性」がドイツ語の否定表現にもあるという主張を成り立たせるための条件を挙げました。ドイツ語としては何ら対照性という意味合いを持たない部分否定といわれる表現が、日本語では《対照の「は」+否定》という形で翻訳される、というだけのことなのか、そうでなければ、ドイツ語の部分否定といわれる表現のうち対照性の意味合いを持つものだけが《対照の「は」+否定》という形に翻訳されるということになるのか、という議論でした。すでに第二・三章で議論したように、ドイツ語で一般に部分否定とよばれる、否定の操作域の違いによる様々な解釈の可能性は、日本語表現の様々な否定の解釈の可能性と対応するものです。そして、日本語では、否定の係り方、否定の操作域の範囲の違いは、対象の「は」が用いられるか否かに関係なく、様々な解釈できるという観察をしました。ドイツ語の否定には、「sondern-文」によって際立たせられる「対照性」の意味合いが含まれ得るということです。

例文(27)で「代替性」をあらわす表現「für sie」は、余剰な感じでした。このことから、「sondern-文」には代替性の意味合いがすでに何らかの形で含まれているのではないかと推測されます。これが、「sondern-文」の内容が先行表現の否定の操作域の範囲と一致していなくてはいけない理由です。代替表現は、先行表現で否定された内容について、その内容を代替すべき「欠落」とするものなのです。

5. 終りに

ドイツ語には、「対照的否定」というものがあり得、それは「sondern-文」で際立たせられるものである。また、この「対照的否定」という概念はドイツ語の意味を論じる場合に、「部分否定」と重ね合うところがあり、有用な概念であり得るのかという疑問に対して、肯定的な答を出しました。

この結論を導くのに、この論考では日本語との対照的な視点から議論を試みました。実は、対照文法という言語学の一方法について、私自身、多少懐疑的な気持ちでいます。この結論を書いている今も、釈然としない所もあります。それは、言語研究が、一つのまとまった体系としての「言語」を対象とした科学であるべきであるという、ソシュール流の考えに私が強く共感しているからです。この論文では、一つの独立した言語＝ドイツ語を記述の対象としています。そして、その言語とは歴史・地理的に全く掛け離れた言語＝日本語との対照比較から、記述対象言語の意味記述にとって必要な概念を導き出そうとしました。例はよくないと思うのですが、博多の地図をもって大阪の街を探索するのとも似た暴挙かもしれません。

しかし、チョムスキーが言うように、言語の問題は大きな意味では、人間の認知の領域の問題です。そして、筆者自身のように、日本語を母語として育ち、成人してからドイツ語を修得し、その研究に脂汗を流している人間が大勢ではありませんが生きているわけです。成人してからの母語以外の言語の習得がどの程度に可能なかという問題は脇に置きますが、なんとかその言語を使って商売をしているわけです。少なくとも、私は、私の母語＝日本語の能力を基底にすえて、私のありとあらゆる認知的な能力・蓄えを添う動員して、ドイツ語の表現を理解したりしているのです。言語の意味の理解は、このような人間の認知的な領域に根ざしたものです。そのような考え方を取るならば、日本語を母語とする私が、どのようにドイツ語を相手になんとか相撲を取れている(?)のかという問題は、興味深いものではありません。

対照研究の対象となる二つの言語が体系として全く掛け離れたものであるとき、その言語体系そのものの比較・対照はたいして興味を引かないことであるだろうと思います。しかし、その二つの言語を媒介とする人間がいて、その媒介を据えた上での対照研究は、少なくとも、その人間を認知的主体ととらえるかぎり、意味を持つでしょう。特に、日本語とドイツ語のような掛け離れた言語について、成人が一方の言語の母語としての能力を基底にすえて他方を習得するという作業領域においては、学習または教育を支える程度の補助となりうるかもしれません。

この論文で扱ったような、否定における「対照性」のような問題では、事情は少し特殊かもしれませんが。一方の言語＝ドイツ語には「対照性」という概念が直接の表現手段としては存在しないわけです。この場合、もう一方の言語＝日本語に明示的に存在する「対照性」を手掛かりに、ドイツ語における「対照性」を議論するという手法は確かに有用であるように思えます。しかし、先ほど留保した、成人の非母語習得の限界ということを考えていみると、この対照文法という手法には問題が付きまといます。一方の言語を基礎に、どれだけの確かさでもってもう一方の言語について議論が展開できるのか、という問いについて私は残念ながらはっきりとした答を持っていません。

注釈:

- 1) Jacobs 1982, s. 34 ff.
- 2) 下線部、「表現として」とわざわざ書き加えたのには理由があります。ある肯定表現は、理解の仕方によっては、「解釈として」否定的な情報をもたらすのです。以下の例文を見てください。

- i) Ist Luise gestorben?
 ii) Luise hat Peter angerufen.
 iii) Luise ist nicht gestorben.
 iv) Luise hat Peter angerufen, also sie ist nicht gestorben, sondern noch am Leben.

例えば、(i) のような文のあとの (ii) は、(iii) のような含みを持つかもしれませんが、しかし、それにもかかわらず、(iv) の sondern 以下は、その直前の表現として否定を含む「sie ist nicht gestorben」の部分とのかかわりで意味を持つだけです。「Luise hat Peter angerufen」の部分とはまったくつながらないのです。

- 3) 久野 1973, 31ページ
- 4) 同上
- 5) 機械的に考えれば、次のような分析も可能ですが、実質的には意味をなしません。

$$\begin{array}{l}
 (\\
 (\\
 (\\
 (\text{NEG} \langle \langle \langle \langle \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \langle \langle \langle \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle \rangle \rangle, \\
 \quad \langle \lambda, Y_{\langle 1 \rangle} \rangle \\
 \quad \quad \langle \lambda, X_{\langle 1 \rangle} \rangle \\
 \quad \quad \quad \langle \lambda, \text{PRED}_{\langle 0, 1, 1 \rangle} \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \langle \text{PRED}_{\langle 0, 1, 1 \rangle}, X_{\langle 1 \rangle}, Y_{\langle 1 \rangle} \rangle \langle 0 \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle 0, \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle \langle 0, \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle \langle \langle 0, \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle \langle \langle 0, \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \text{ペーター} \langle 1 \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle \langle 0, \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \langle 1 \rangle \rangle, \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \text{ルイーゼ} \langle 1 \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle 0, \langle 0, 1, 1 \rangle \rangle, \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \text{電話する} \langle 0, 1, 1 \rangle \\
 \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \quad \rangle \langle 0 \rangle
 \end{array}$$

下線部=NEG の操作域には、述語にしても、個体にしても定項が存在しません。つまり、述語変項と個体変項だけで成り立っているのです。この場合、否定「NEG」の操作に係る、係らないに関係なく、この部分は命題の型を示しているのにすぎません。

文献:

- Jacobs, Joachim 1982, Syntax und Semantik der Negation im Deutschen. Studien zur Theoretischen Linguistik 1. Wilhelm Fink Verlag, München
- Schulz, D. & Gliesbach, H. 1967, Grammatik der deutschen Sprache. 4. Auflage. Max Hueber Verlag, München. (日本語版、シュルツ/グリースバハ、ドイツ文法、稲木 他訳、三修社、東京、1971)
- Grebe, Paul 1973, Der Duden, Grammatik der deutschen Gegenwartssprache 3., neu bearbeitete Auflage. Bibliographisches Institut, Mannheim
- 久野 暉 1973 日本文法研究、大修館、東京
- Takeuchi, Yoshiharu 1982, Negation in der Sprache. In: Doitu Bungaku, Bd. 69, hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik (ドイツ文学 69巻、日本独文学会編集)

Zusammenfassung

Um den Kontrast in der kontrastierenden Negation auszudrücken, besitzt das Japanische ein grammatisches Hilfsmittel und zwar die kontrastierende Partikel "wa". Im Deutschen gibt es aber dafür keine direkte Entsprechung. Deutschen vielmehr keine direkte sprachliche Möglichkeit, mit der ein Kontrast in negativen Sätzen zum Ausdruck gebracht werden könnte. Deshalb ist die von Joachim Jacobs behauptete Existenz des Begriffspaares "kontrastierende vs. nichtkontrastierende Negation" im Deutschen schwer nachweisbar.

In der vorliegenden Arbeit wird versucht, die Jacobs'sche Behauptung, durch eine kontrastiven Betrachtung der Negationsweisen des Deutschen und des Japanischen nachzuweisen. Die einzelnen Sätze wurden gemäß meinen Untersuchungen zur Negation (Takeuchi 1982) genauer analysiert, und die Möglichkeit ihres Übersetzens wird näher betrachtet.

Dabei ist folgendes klar geworden: Es gibt auch im Deutschen "kontrastierende Negation", die durch die "sondern-Phrase" verdeutlicht wird. Eine "kontrastierende Negation" überkoppelt nicht einfach mit der Teil-Negation (Satzgliednegation). Sie bedeutet nicht einfach Ersetzung eines etwas Fehlenden. Es gibt deutsche Sätze mit der "sondern-Phrase", die weder eine direkte Ersetzung, noch eine reine Teil-Negation sind. Solche Negationssätze sollten als "kontrastierende Negation" des Deutschen anerkannt werden.